

国宝「玉陵」の魅力と謎

理事長 高橋 康夫

はじめに

沖縄県那覇市首里にある玉陵^{たまうどろん}は、琉球王国の第二尚王統の王陵であり、第三代の尚真王（在位1477～1526年）が1501年ころに築造した。首里城の西、守礼門^{あやしゅうふみち}の前の綾門大道に面して南側にあり、琉球石灰岩の丘陵上、北側斜面に造られている。およそ造営時、15世紀の姿を伝えていること、また琉球・沖縄において最初で最古そして最大の「破風墓」（建築墓）であり、細部も含め意匠・構造に優れていることなど、その価値が高く評価されてきた。さらに沖縄の歴史や建築文化、葬墓制を考える上で貴重であることなど、文化史的にも深い意義があることとあいまって、平成30年12月25日、玉陵は沖縄県で初めての国宝建造物に指定された。

令和元年7月7日、玉陵の所有者である那覇市によって「玉陵国宝指定記念シンポジウム」が開催され、私も国宝指定にかかわった一人として基調講演の機会をいただいた。「ユーラシアのなかの玉陵」について説明し、玉陵は「琉球が東アジア世界との交流のなかで創出した独自の歴史と文化を象徴しており、世界の、日本の、沖縄の文化遺産として格別に優れた価値をもっている」と述べた。ありがたいことにシンポジウムではさまざまな点で



写真1 玉御殿 墓室及び石牆全景（北から南を望む） 那覇市文化財課提供

啓発され、大きな刺激をうけることができた。そこで本稿はそうした貴重な体験、そして玉陵についてあらためて考え直したことを加えて、国宝玉陵の興味深いところやふしぎなところ、その魅力と価値を説明したい。

なお、玉陵は、国指定の文化財（国宝建造物、史跡）としての名称も、また世界遺産としての日本語表記も「玉陵」であるが、次に述べる理由から以下では「玉陵」とともに、「玉御殿」を使用する。

1. 「玉陵」は「たまうどうん」——名づけの謎

「玉陵」という名称をみて「たまうどうん」といえる人は、かなり少ないのではないか。「玉」は訓読みの「ギョク」ではなく、「たま」と音読みする。また「陵」という漢字は、音読みでは「リョウ」、訓読みでは「みささぎ」「おか」とか、「しのぐ」であるから、「うどうん」と読めるわけがないのである。

なぜ「玉陵」と表記され、「たまうどうん」と呼ばれているのだろうか。

玉陵は琉球石灰岩の石垣によって墓域の外周を囲み、また墓域を内郭と外郭の二つに区画している。その外郭の庭、東方に尚真王が建てた石碑「たまおどんのひのもの」（中国福建省産の輝緑岩製、1501年）がある。この碑文からもともと「たまおどん」と表記、発音されていたことがわかる。琉球史家高良倉吉によると、「王府レベルの行政文書では「玉御殿」と表記されるのが常である」という。



写真2 玉御殿 墓室全景（東から西を望む） 那覇市文化財課提供

「おどの」＝「御殿」は、王などの貴人の邸宅のこととされるが（『沖縄古語大辞典』）、はじめて墓を「御殿」と呼んだことは大きな特徴といえよう。尚真王の時代にはすでに「おどの」は「おどん」に変わっていた。「たまおどん」から「たまうどうん」への変化は、琉球語の音韻変化〈お→う〉によるものである。ともかくも、「たまおどん」＝「玉御殿」は王の死後の宮殿であって、生前の「ももうらそえおどん」＝「百浦添御殿」（首里城正殿）に対応している。ただ、玉御殿は、王の死後の宮殿であるとはいえ、その墓室には死後の生活を支える部屋や副葬品がないこと（生前と同じような肉体をもった姿で暮らすと考えていないこと）は、玉御殿の特性を示す重要な点である。

「玉御殿」の漢訳である「玉陵」という表記は、今、広く定着している。しかし、「たまうどうん」という読みを伝えているにしても、その「陵」が、宮殿建築ではなく、墳墓をイメージさせることなどは見過ごせない問題点であろう。

玉御殿を理解するためにも、将来、それもできるかぎり早い機会に本来の「玉御殿」表記に戻すことが大切ではなかろうか。このような思いも込めて、私は「玉御殿」と書くことにしている。

2. どのような墓なのか？——〈洗骨〉の謎

高く聳える胸壁形式の石牆が、あたかも玉御殿が城郭グスクであるかのように玉御殿の墓域を堅固に囲い込んでいる。

玉御殿の墓室は、自然の岩壁を人工的に掘り込んで造られており、崖葬墓（堀込墓）の伝統を受け継いで築造されているが、本体は宮殿の様式をもつ大規模な石造建築墓（沖縄でいう「破風墓」）である。すなわち堀込墓と建築墓の複合墓であるのが大きな特徴となっている。玉御殿は、琉球の最上級の建築であった首里城正殿をモデルとしたが、木造を石造に置き換えたのは、「千年万年にいたるまで」（玉御殿碑文）とあるように永遠性を志向したからであろう。こうして革新的、画期的な琉球王陵の様式が出現した。

墓室は東室と中室、西室からなる。いずれも切妻造で、板葺き屋根を表す磚瓦を葺いているが、東室は二重、中室と西室は一重としている。

中室は遺体安置と洗骨の場であり、洗骨を済ませた遺骨は、王と王妃が東室に、その他の王族が西室に納められる。琉球の伝統的な葬墓制にともなう遺体安置（風葬）と洗骨、遺骨安置の場が三室構成の墓室として建築化されている。いい方をかえると、玉御殿は、王の遺体を安置する葬所であり、遺骨を納めた石厨子などを安置する墓所なのである。

墓室前面には獅子や蓮華などの浮彫を施した石製欄干付きの基壇（露台）を設ける。墓室正面に白漆喰を塗り、アーチ形の開口部に青石製扉を建て込む。墓室内は壁と床とも石



写真3 巖頭・東室・円塔、基壇



写真4 中室・西室

で造る。建立時あるいは修理時は、漆喰塗りの白化粧によって真っ白な姿を見せていた。

中央の円塔と東の巖頭、西の台の上には高さ約1メートルの石獅子が立っている。

ところで、洗骨というと、火葬が一般化した現代ではいかにも奇異に聞こえるのではない。しかし、土葬や風葬などのあと、遺骨を水や酒によって浄める洗骨は、一般的な習俗であった。縄文時代・弥生時代・古墳時代には日本列島全土に広まっていたし、また世界的にもインドネシア、メラネシアなど環太平洋圏に広く分布するという。琉球・沖縄もそうした洗骨を行う地域の一つであって、琉球国王から庶民にいたるまで清浄化された遺骨を石厨子や厨子甕などに納めて墓（集合墓）に安置した。

ユーラシアのなかで、玉御殿のように葬所と墓所が並存、一体化している王陵、また洗骨葬である王陵はきわめてめずらしく、おそらく唯一の事例ではなかろうか。そのいずれの特性も、琉球の伝統的な民俗文化、葬墓制を反映していることは、とくに注目すべき重要な点といえよう。

3. 非対称あるいは「奇」の美——デザインの謎

玉御殿は、その建築デザインにおいても顕著な特性をもっている。非対称(アシンメトリー)の様式美あるいは「奇」である。

沖縄の建築を調査した建築史学者伊東忠太は、玉御殿について「外観は二室連続した姿で、実に堂々たる構へである。……鬼気身に沁みる閑寂の裡に、一種の神秘的なる魔力がひしひしと人を襲うような気分である。何等建築としての奇も巧もないが、慥かに嵩高偉大なる建築である」と述べている(『木片集』萬里閣書房、1928年)。伊東は、「嵩高偉大なる建築」と高く評価しながら「建築としての奇も巧もない」というが、しかしながら「奇」がめずらしいことや変わっていて興味深いこと、「巧」がたくみなことをいうのであれば、



写真5 墓室屋根（西から東を望む）と琉球石灰岩の露頭 那覇市文化財課提供

玉御殿には「奇」や「巧」というべき特徴は、実は少なくないのである。

その一つ、玉御殿を圍繞する石牆は、平行する辺が一つもない歪んだ五辺の多角形（おおざっぱに言えば長方形）である。また、奥に行くほど高く聳える胸壁形式の石牆は城郭を、露出する巖頭は大型グスクの聖地を想起させるなど、山頂に構築された大型グスクをイメージさせるのも、「奇」である。これは「巧」であるともいえよう。

さらに、非対称の様式美を一貫して追求しているのは、「奇」と「巧」であろう。玉御殿は平面図を一目みれば明らかなように、東アジアの都城や宮殿に普遍的にみられる中軸線・左右対称といった様式美や空間構造を採用していないし、ユーラシアの記念建造物に特徴的な円形（アウグストゥス廟など）やイスラーム墓建築の正方形、八角形も用いない。また、ギリシア・ローマの美の規範であり、普遍性をもつといってよいシンメトリア（均衡）も、単純な形ではみられない。しかし、ひたすら対称性を打破し、忌避し、非対称の様式美を追求

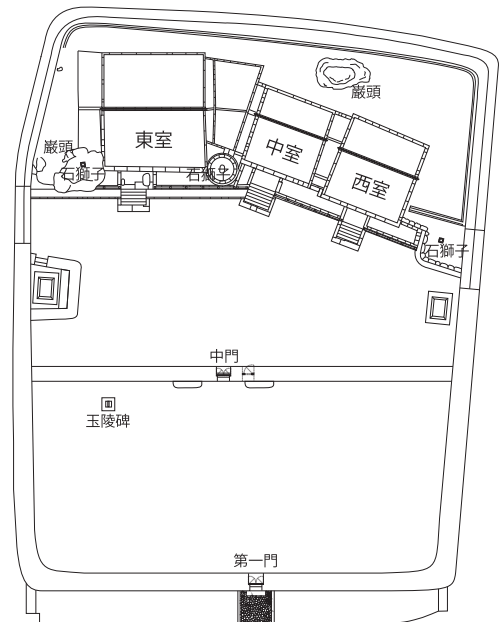


図1 玉御殿 平面図

しながらも、そこには全体としてダイナミックな均衡がたしかにあるのではないか。伊東忠太のいう「堂々たる構へ」には、このような意味のシンメトリアも含まれていたにちがいない。

考古学者の安里進は、大型グスクの石造技術とともに発達した石造美は、首里城で曲線・曲面と歪みの石造美として花開き、15～16世紀に整備された王都首里の石造文化へと受け継がれたという。その16世紀の王都首里の石造文化、石造美を代表する建造物の一つとして玉御殿をあげ、「首里城で発達したアシンメトリーや歪みを取り入れられている」と指摘しているのは卓見というべきであろう。

ところで、18世紀初めころ、当代きっての政治家・学者である蔡温は、王命を承けて玉御殿の風水を検分した。その結果、玉御殿の土地は俗人の理解を超えた「奇形」、風変わりな地形と報告していることが注目される。さらに玉御殿は首都首里の重要な構成要素として王城至近の地、綾門大道（朱雀大路に相当する）の守礼門と中山門のあいだの地を占めているが、古代～明・清の中国、朝鮮、平安京・京都などのように、首都の郊外や遠隔地に陵墓を築く東アジアにおいては、玉御殿の立地もまた「奇」である。要するに、玉御殿は、その土地も、選地・占地も、「奇」なのである。

なぜ、この「ところ」が選ばれたのかはわからないが、それぞれが琉球固有の信仰にもとづく至上の聖地というべき、〈弁之御嶽〉—首里森グスク・真玉森グスク（ともに首里城内の御嶽）—玉御殿の位置的な関係、いいかえると〈聖なる御嶽の東西軸〉を想定するのも一つの仮説として有力であろう。また、祖先（祖霊）信仰に篤い尚真王にとって、固有信仰の「霊廟」とも「神殿」ともいうべき玉御殿（第5節参照）の土地は、同じく自身の創建になる外来宗教の円覚寺（臨済宗、王家の菩提寺・宗廟）の立地、すなわち首里城北隣に勝るとも劣らない、この「ところ」しかなかったのかもしれない。

玉御殿があくまでも対称性を忌避して独自の造形を追求し、「嵩高偉大なる建築」を創ったことは、類い希なできごとである。琉球王国の建築文化の伝統や固有性を継承しながら、新規な様式の創造を企てるその大きな動因となったのは、宗主国の明や朝鮮、日本などの対外関係に由来する、いわば「近代化」の自意識ではなからうか。



写真6 東端の石牆、琉球石灰岩の露頭、石獅子

4. 尚真王と首里と玉御殿——新たな王統の確立

14世紀後半の東アジアは激動の時代であった。1368年、元を滅ぼした朱元璋^{しゅげんしやう}が明王朝を創建し、1392年、足利義満が南北両朝を合併して統一を果たし、翌1393年には李成桂^{りせいけい}が国号を朝鮮と定め、建国した。琉球においても15世紀の初頭、尚巴志^{しやうはし}が小国家を打倒して統一を成し遂げ、琉球王国が誕生した。しかし、この第一尚王統はわずか数十年で滅び、1470年に尚円^{しやうえん}が即位して第二尚王統（～1879年）が始まった。

王位継承（先王の死去、新王の即位）に際して不可欠な儀礼が明の皇帝による冊封（さくほう・さっぽう、琉球国王号の授与）であり、そこで大きな意味をもったのが先王の霊を祀る宗廟である。尚真期には、琉球歴代の国王を祀る国廟の崇元寺を始め、第二尚王統の王廟の円覚寺（尚真王が1494年に創建、菩提寺）、王妃廟の天王寺（尚円王の創建、その菩提寺）、王子廟の天界寺、さらに歴朝の王廟である龍福寺（浦添）などがあつた。

国廟の崇元寺が首里から離れた泊^{とまり}の地にあつたのは、首都のなか、王城近くに宗廟を置いた明や朝鮮などとは大きく異なつていた。一方、王廟かつ菩提寺の円覚寺は首里城の隣に配置された。これは京都の室町殿と相国寺の関係と同じである。

ちなみに、上にあげた禅寺のうち、崇元寺・円覚寺・天王寺・龍福寺の開山は京都の南禅寺ゆかりの日本人禅僧^{かいいんじやうこ}、芥隠承琥であり、一方、天界寺の開山は日本で禅の修行をした琉球人禅僧^{けいゐんあんせん}、溪隠安潜である。琉球と日本の深い交流をものがたる史実の一つである。

ところで、第一尚王統の時代にはすでに中国から仏教・道教・天妃信仰が、また日本からも仏教・熊野信仰・伊勢信仰などが伝わっていた。これら外来の宗教・信仰のうち王権と深くかかわつたのは禅宗（臨済宗）であり、禅宗寺院は首都の首里に許された唯一の外来宗教・信仰の施設であつた。なお、国際交易都市那覇には臨済宗や真言宗の寺院、道教の宮・廟、波上権現などの神社建築が建てられ、国際色豊かな都市となつていた。



写真7 円覚寺にみる石造美
放生橋（重要文化財、1498年）と石階



写真8 円覚寺にみる石造技術
石階の曲線（視覚補正）

尚真王は首都首里の大造営を行ったが、それは、端的に言えば、新造をともなる菩提寺と王廟と王陵の再配置であった。こうして王陵と、菩提寺・王廟・王妃廟・王子廟を含む禪寺、神社などが守護するかのようにはりめぐらす、王都首里と首里グスク（王城と聖地）が形成された。玉御殿は大造営の掉尾を飾るものであり、それが国土を統治する王の象徴＝「玉」の御殿であることはまさに象徴的というほかない（次節参照）。

玉御殿碑文を建立した1501年は、尚真王が宮古・八重山を王国体制に組み込み、いわば天下統一を果たした直後のことであった。自らの王統と国土の確立、さらにその末永き継承を宣言する意味も込められていたのであろう。

5. 聖域グスク——何を祀っているのか？

さて、玉御殿外周石垣の正面の門、そして内郭と外郭を隔てる石垣の門は、ともにアーチ形になっている（楣石から彫りだしているのでアーチ構造ではない）。この出入り口のアーチ形をはじめ、敷き詰められた白い枝サンゴ、高く聳える石牆による囲い込みなどは、玉御殿が聖なる空間であることを明示している。こうした形式や材料、そしてその空間構成から、玉御殿はグスク、それも聖域グスクにはかならないと考える。

グスクといえば、首里城などの世界遺産の城郭遺跡が有名であるが、グスクの特色は「石垣で囲まれている」ことであって、城館のほかに聖地（拝所・葬所）、集落などを意味することはあまり知られていないようである。

聖域グスクである玉御殿は、その規模・構成から、安里進の分類による「大型グスク」に含まれることが興味深い。大型グスクとは、2000平方メートル以上の広さ、大規模で複郭構成、「正殿－御庭」の空間構造をもつ、などの特性があるという。安里は大型グスクと玉御殿との共通点として「正殿－御庭」構造を指摘したが、墓室が「正殿」、内郭の庭が「御庭」にあたる。玉御殿はいままでもなく複郭構成である。

安里のいう大型グスクの「正殿－御庭」構造の基底には、垣に囲まれた空間に中心建築と庭（にわ・ば）を配する伝統的な空間構造がある。大型グスクのみならず、広く波上権現などの神社や廟などにも同様の空間構造がみられるのは、こうした空間構造が普遍的な性質を持っているからであろう。玉御殿が普遍的な特性をもつ大型グスク、聖域グスクとして築造されたということも、大切な点であろう。

ところで、玉御殿の「玉」はどのような意味をもっているのであろうか。これまで問題にされたことがないようであり、聖域グスクと祭祀という観点から少し眺めておこう。

琉球の玉御殿の「玉」には、美称の接頭語として、ふつうに使われる「立派な、すばらしい、大切な」などの意味とともに、よりいっそう深い特別の意味がある。それは呪具・

祭具として使用される「玉」が強く王・王権とかかわったとき、地域・国を支配ないし統治する霊力をもつ玉、また時に神のように扱われる玉、という姿をあらわす。そして神である玉は、その霊力によって琉球の国土を統治する王を守護することから、王のシンボルとなるのである。

玉御殿とは、「りっぱな、すばらしい、大切な宮殿」や「御殿の中でいちばん美しく大切な宮殿」であることは確かであるが、それ以上に神である玉の霊力に守護されて国土を統治した王たちのシンボル、すなわち神の玉が安座する宮殿＝神殿であり、はるかな昔、祖先神の時代から続く琉球王国の統治の象徴なのである。国王の遺骨を「美骨玉」というのも、きわめて示唆に富んでいる。高い石牆に囲まれ、真っ白な枝サンゴを敷き詰めた清浄なところにたつ清らかな白い玉御殿は、そうした含意を具現化しているようにみえる。

神の玉の神殿＝玉御殿の^{ぬし}主は、いうまでもなく神の玉と祖先神（祖霊神）である「玉」、歴代王の清浄な遺骨とそれらがあらわす祖先神（祖霊神）の霊である。このように考えるなら、玉御殿は「玉」と骨と霊を祀る聖域グスクであり、琉球固有の伝統的な祖先信仰（祖霊信仰）に基づく墓廟（宗廟）なのである。

ところで、琉球の開闢神話によると、琉球国王の先祖は天帝の御子の長男とされるが、琉球国王を太陽神の末裔とする「太陽子思想」があることも注目される。そうすると、玉御殿は太陽子である王たちの遺骨を安置し、それらが象徴する太陽神を祀る聖域グスクと理解しなければならない。

なお、18世紀になって清明節に儒教的な宗廟祭祀が行われるようになった。これは玉御

殿がもともと宗廟であったことを顕在化させたという点で重要なできごとであった。琉球文化の中国化を示す典型的な事例であるとともに、沖縄の^{シーミー}清明祭のルーツとしても大きな歴史的・文化的な意義がある。

玉御殿とは、第二尚王統のたんなる墓ではなく、大型グスクと同じ空間構造をもった祖先神（祖霊神）と太陽子の聖域グスク、葬所と墓所と廟所の聖域グスク、そして宗廟なのである。「玉御殿」という名称は、建築化された琉球最初の神殿建築であることを高らかに宣言しているのではなかろうか。それこそが「玉御殿」という新奇な、

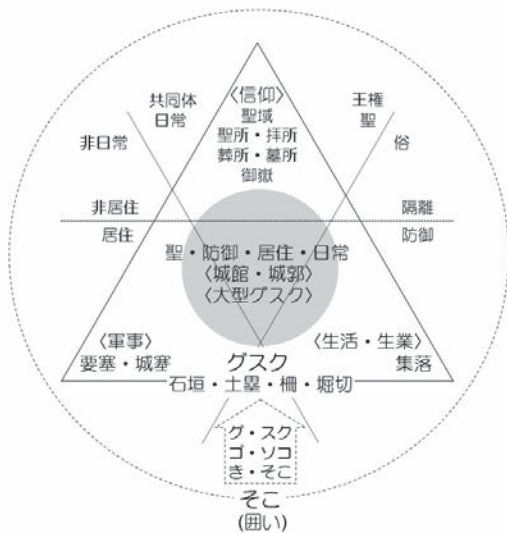


図2 グスクの概念構造

しかも濃密な内容をもつ名称を創り出した最大の理由ではなからうか。

玉御殿は、琉球の伝統的な民俗（葬墓制）とグスクとその正殿の建築的表現をもち、固有の信仰・思想（琉球神道と太陽子思想）や外来の儒教などが複合・重層した希有の王陵といえよう。「玉御殿」には琉球の歴史と文化が凝縮されている。

まとめ、新たな目標と課題

玉御殿の前に立つと、私はいつも思う。玉御殿は静謐さのうちにある「高高偉大なる建築」であり、聖なるグスク、琉球の「神宮」なのだ、と。

さらに玉御殿の価値と意義を付け加えるなら、冒頭にあげたように、「玉御殿は、琉球が東アジア世界との交流のなかで創出した独自の歴史と文化を象徴しており、世界の、日本の、沖縄の文化遺産として格別に優れた価値をもっている」ということにつきる。

こうした玉御殿の価値を将来に伝えるために、シンポジウムではいくつかの提案をさせていただいた。一つは、玉御殿の価値をよりいっそう高めることである。玉御殿は今、国指定史跡でもあるが、「特別史跡」の価値を内包しているのではないかと私は考えている。沖縄県初の「特別史跡」の指定へ向かって、玉御殿とは何か、どのような「ところ」であったか（土地の歴史、首都・王城との関係）といった根本的な課題に応える調査・研究が不可欠であろう。

第二に、玉御殿の価値を活かすため、そして琉球王国の首都、首里の歴史的都市景観を保存・継承していくために、首里の「重要文化的景観」選定を目指すことも大きな手がかりになるのではないか。今の首里にはまだ都市の文化的景観の重要な構成要素となるべきものが少なからず存在している。一例を挙げると、〈「弁之御嶽」—首里城—玉御殿〉、綾門大道・金城町石畳道、円鑑池・龍潭、樋川、石垣などがある。

※「弁之御嶽」は2018年6月、史跡に指定され、また名勝「アマミクヌムイ」に追加指定された。沖縄県で最初の史跡と名勝の同時指定。

第三に、同じように玉御殿の価値を活かすために、歴史まちづくり法にもとづいて「那覇市歴史的風致維持向上計画」を策定し、「歴史まちづくり」へ向かうことである。

これらは、相互に関連する取組であり、玉御殿の保存と活用が古都首里のまちづくりの核となることを期待しているものである。

付記 本稿は、高橋康夫ほか『京都・平泉・首里——都市と宗教・信仰』（ユーラシアのなかの日本中世都市研究会、2018.3）に拠りつつ、再考を加えたものである。また高橋康夫「ユーラシアのなかの王陵」（『月刊文化財』664号、第一法規、2019.1）がある。

謝辞 貴重な空撮写真などの掲載をお許しいただいた那覇市文化財課にお礼を申し上げます。